

# 設楽発掘通信

No.19  
平成28年  
6月号

## 川向東貝津遺跡の 地元説明会を開催します。

昨年度の五月から十一月にかけて発掘調査をおこなった川向東貝津遺跡の今年度分の調査を、五月二十三日から開始しました。

昨年度の調査では縄文時代中期と後期の集落跡（今から四千八百年～四千四百年前）を発掘し、昨年七月四日に開催した地元説明会では、縄文時代中期のたいへん残りの良い石囲炉をもつ竪穴建物跡などをご覧いただきました。

今年度の調査は、昨年度の調査区の西側およそ三分の一の範囲で確認した、より古い時代の縄文時代草創期（今から一万二千年前）と後期旧石器時代の石器群（今から一万六千年前以前か）で、調査面積は八一〇㎡です。昨年度の調査でも、木葉形尖頭器やスクレイパーなどが出土しましたが、今年度の調査でも有舌尖頭器などの石器が出土しはじめており、当時の様子が明らかになりつつあります。

つきましては、今年度も下記のように、七月二十三日（土）の午前十一時から、**現地**で地元説明会を開催することとなりましたので、よろしくお願いいたします。

（愛知県埋蔵文化財センター 樋上昇）

### 川向東貝津遺跡地元説明会 会場のご案内

7月23日（土）午前11時から、発掘現場で開催予定です。

お車でのご来跡の際は、設楽大橋西詰付近までお越し下さい。当日、係りの者が駐車場をご案内いたします。

\*開催の詳細・お問い合わせは、愛知県埋蔵文化財センター調査課（電話 0567-67-4163）、

樋上 昇 携帯（080-1571-4983）、あるいはホームページ（<http://www.maibun.com>）をご覧下さい。



### 滝瀬遺跡の発掘調査

滝瀬遺跡は、昨年度から引き続きの調査となります。今年度は昨年度の調査区の周囲を調査します(写真2)。期間は五月から十一月ごろにかけて行う予定です。

昨年度の調査では縄文時代早期(今から約九千年前～七千年前)・中期(今から約五千五百年前～四千四百年前)・後期(今から約四千四百年～四千年前)を中心とした遺構・遺物が見つかりました。主な遺構としては、穴の中に多量の石が入られた集石炉や石を組んで作られた石囲炉、貯蔵施設と考えられる袋状に掘られた土坑などが見つかりました。また少数ではありますが、竪穴建物も見つかっています。出土遺物の中で特徴的なものとしては注ぎ口のついた土器(注口土器)や土掘り具と考えられる打製石斧、漁に使う網に付けるおもりと考えられる石錘などが見つかりました。今年度の調査でも、昨年度と同様の成果が得られるのではと期待しています。また、より広い範囲を調査するので、当時の地形などさらに多くのことが分かるかもしれません。

また、調査に先立って以前から存在が知られていた落書き石の移設が行われました(写真3)。移設先は設楽町内の奥三河郷土館ですが、現在は未公開となっております。石には墨で文字や記号が描かれています。何が描かれているか、いつ描かれたもののかなどは今後の調査で明らかにされていくと思います。

現在は東側から調査を開始していません。調査はまだ始まったばかりですが、すでに土器や石器の破片がたくさん見つかっています。まだ詳しい時期などは分かりませんが、今後の調査にご期待ください。

(安西工業株式会社 岩瀬大輔)



写真3 落書き石



写真2 滝瀬遺跡 調査前写真(奥が東)

### 川向東貝津遺跡の発掘調査

川向東貝津遺跡は、設楽大橋の南西に位置し、豊川の支流にあたる境川右岸の河岸段丘上に立地しています。戦後までは棚田が残り、その後に杉が植林された平坦面が今年度の調査範囲(面積八百平方メートル)です。

平成二十二年度には今回調査区の北側で発掘調査がおこなわれ、縄文時代後期(今から約四千四百年前)の埋蔵と集石土坑などが確認されています。昨年度では上面で縄文時代中期(今から約四千八百年前)の竪穴建物跡が四棟と縄文時代後期の竪穴建物が三棟、そのほかにも屋外炉の可能性がある集石土坑や陥し穴などを確認しています。なかでも縄文時代中期の竪穴建物からは、遺存状態がきわめて良好な石囲炉や埋蔵などがみつかっています(設案発掘通信No.14・15号を参照してください)。下面は補足トレンチと範囲確認調査がおこなわれ、石器を作る際に生じる剥片のほか、木葉形尖頭器などがみつかっています。今年度の調査では縄文時代草創期(約一万二千年前)と、後期旧石器時代(今から一万六千年前以前)の二時期を二面に分けて調査をします。石器や石材をみつめるのが目的なので二メートル四方のグリッド(柵形)を設定し、一柵ごとに掘り下げていきます。こぶし大の石器から二ミリ程度の剥片までをみつける作業のため時間と労力を使っておこなっていきます。

今までに愛知県内での旧石器時代発掘調査が十例程度しかおこなわれていないため、貴重な遺跡、資料となることでしょう。

写真4は調査前の全景で、まだ遺跡保護のため養生シートでおおわれていますが、皆様のお手元に当通信紙が配布される頃には成果があらわれているものとおもわれますのでご期待ください。

(安西工業株式会社 坂口尚人)

範囲確認調査も、八橋地区の永江沢遺跡と小松地区のマサノ沢遺跡で五月十六日から始まっています。

範囲確認調査は一×二mの試掘トレンチを基本に遺跡範囲内を点々と調査します。注目すべき成果が出たときは今後の設案発掘通信でお知らせします。

(安西工業株式会社 入江剛弘)



写真4 川向東貝津遺跡 調査前写真(奥が東)

## 設楽郡創設時の土器

設楽町が属する北設楽郡は、現在、愛知県北東部を占めています。明治一二年（西暦一八七八年）までは、豊川以北の新城市域に相当する南設楽郡とともに設楽郡という一つの郡でした。

その設楽郡の創設は、平安時代にさかのぼります。承平年間（西暦九三一〜九三八年）成立の『和名類聚抄』という辞書には当時の三河国に八つの郡（碧海・額田・賀茂・幡豆・宝飫・八名・渥美・設楽）のあったことが記されています。ところがその少し前の『延喜式』という法典には、頭注ではありませんが、延喜三年（西暦九〇三年）に宝飫郡から設楽郡を割いて設置したことが

記されています。つまりそれまでは三河国府のある豊川下流域も含めて一つの郡だったわけです。それが一〇世紀になって初めて、上流域を別の郡とする事になったのです。

写真5 南ヶ岳遺跡出土 清郷型鍋 口縁部破片  
【左：断面、右：横から】（奥三河郷土館所蔵）



残念ながら設楽郡分置の理由は記されていませんが、考古学的には推測が可能です。というのは、特に北設楽郡域では古墳時代や奈良時代の遺跡は多くないのですが、平安時代の遺跡は格段に増加するからです。つまり山間部の集落や人口が増えたために、新たな支配の拠点と区域の設定が必要になったと考えることができるのです。

例えば、今年度範囲確認調査を予定している南ヶ岳遺跡では、清郷型と呼ばれる平安時代の土師器鍋が採集されています（写真5）。やや暗い色調で角礫の多く混じった胎土、そして分厚い特徴的な口縁の清郷型鍋は、一〇〜一二世紀の三河国域を中心に分布していますが、設楽町内の遺跡においても複数の遺跡で確認されています。また、平安時代のやきものである灰釉陶器も、折戸五三号窯時期という一〇世紀前半代のものが特に多くなります。まさにこれらは設楽郡創設の時期に重なってくるのです。しかも、清郷型鍋や灰釉陶器が出土している遺跡では、弥生時代から平安時代前期の遺物がみられないことが多く、縄文時代以来長らく人の定住がなかった場所へ、他からの移住によって再び集落が開始された、と考えることができます。

それではどうして平安時代の人々は山間部に分け入って新たな集落をつくったのでしょうか。木材などの資源を求めた可能性も考えられますが、遺跡の立地環境や中世以降の動向も合わせて調査・研究を進めていく必要があります。

（愛知県埋蔵文化財センター 永井邦仁）

## 設楽発掘通信 No.19 平成28年6月号

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24

電話 (0567)67-4161【管理課】 4163【調査課】

ホームページ <https://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>

Twitter [https://twitter.com/aichi\\_maibun](https://twitter.com/aichi_maibun)



印刷・協力

安西工業株式会社